広島大学附属三原学校園研究紀要　第４集　2014　pp. 55-60

国　語

学ぶ楽しさをつくりだす国語科授業の開発

—小学校６年生「フリードルとテレジンの小さな画家たち」の実践を通して—

渕　山　真　悟

1　はじめに

国語科は，ことばについてことばを通して学ぶ教科である。また，国語力なくして他教科の力を育むことは難しく，すべての教科の根幹を国語科は担っている。しかし，本年度５月に実施した国語の学習についての実態調査から，本学校園の子どもは国語の学習は大切で将来にも役立つと感じていながらも，国語の授業に必ずしも意欲的に取り組めていないという実態が明らかになった。

学習に対する関心・意欲を高めるためには，子どもたちが学習を理解し，できるようになることが求められる。そこで主体的に学び，粘り強く学習しようとしたり，自らが課題を見つけて解決しようとしたりする力を育み，なぜこの学習をしているかなど学ぶ意義を見つめさせることが必要である。以上のことから，「わかる」「できる」ことを実感させ，自らの学びを「広げる」「深める」ことをねらいとして，ことばのおもしろさを感じ，学ぶ楽しさをつくりだす国語科の学習づくりに取り組みたいと考えた。

2　ことばのおもしろさを感じ，学ぶ楽しさをつくりだすために

ことばのおもしろさを感じ，学ぶ楽しさをつくりだすために，下記の５つの視点の中から，ねらいに沿ったものを選択し授業づくりを行う。

①教材を吟味・選択する
　子どもたちの実態にふさわしく，学ぶべき内容が含まれている教材を選択する。
②導入を工夫する
　単元や授業の始めに，学習に対する意欲や関心を高め，疑問や課題意識をもたせることによって，学習意欲を喚起する。
③ことばに着目させる
　普段何気なく使っていることばに立ち止まって考えさせる。
④主体的に学ぶ授業を構成する
　子どもたちが中心になって学習を進めさせる。
⑤学ぶ意義を見つめさせる
　学んだことと日常生活とのつながりを意識させる。

3　実践事例

(1) 単元の概要

①単元名
「フリードルとテレジンの小さな画家たち」
（学校図書６下）　野村路子
②学級　６年１組　38名
③実施時期　2013年10月～11月
④ことばのおもしろさを感じ，学ぶ楽しさをつくりだすための視点
　○主体的に学ぶ授業を構成する(第２次)
　○学ぶ意義を見つめさせる(単元を通して)
⑤単元構成
　第１次　絵を鑑賞しよう（１時間）
　第２次　本文を読んで自分の考えをもとう（４時間）
　第３次　改めて見た絵が訴えるものは（１時間）

⑥題材について

本題材は，第二次世界大戦中，ユダヤ人迫害の中で過酷な生活を強いられた子どもたち，そしてその子どもたちに生きる勇気を与えようと絵を教えたフリードルの生き方を記したものである。史実をありのままに述べ，淡々と語っていく文章は，怒り，悲しみの深さなどを感じながら，人間としての人格，尊厳について深く考えさせられる。ビリーが持ち帰った子どもたちの絵は，どれも命がけのメッセージが込められており「絵から聞こえてくる声を聞いてください。」という語りに対して子どもたちが応え，平和の在り方，自分の生き方を深く考えていくことができる。

⑦単元目標

○歴史的事実や人物の言動，筆者が掲げる主題などについて読み取ったことをもとに，自分を見つめ直し，自分たちの生き方について考えることができるようにする。

○「絵から聞こえてくる声」を聞くために，文章を読むことで，歴史的事実や人物の言動を読み取り，自分の考えが読むことで深まったことに気がつくことができるようにする。

○語感や言葉の使い方に対する感覚に関心を持ち，この学習にあった言葉を意識して使うことができるようにする。

(2) 授業構成の方策・手立て

○主体的に学ぶ授業を構成する

本文を読まなければ学べない必然性を授業の中に作る。そこで文章全体を読んで，部分的に読み深める学習の進めていく形式をとり，読み深める部分も学習のねらいに即して子どもたちの声を拾い上げながら選ぶこととする。

また，子どもに学ばせたいことと，子どもたちが学びたいことをすり合わせ，できる限り子どもたちが学んでみたいと思うことを実現する。今回は子どもたちが「テレジンの子どもたちが描いた絵」をできるだけ多く見られるように，埼玉県平和資料館に依頼して，絵のパネルをお借りして教室に展示する。

○学ぶ意義を見つめさせる

この学習での学ぶ意義を「戦争はいけない」「平和は大切である」という考えをぶれることのないより強固なものとすることとした。

国語科の教科書には，戦争や平和をテーマにしている教材が多くあり，表１はそれらをまとめたものである。その多くは高学年で「話すこと・聞くこと」「読むこと」の単元で取り上げられている。

表１　「戦争や平和」をテーマにした題材

教科書	題材名
東京書籍５上	いわたくんちのおばあちゃん（読む・読書の部屋）
東京書籍６下	ヒロシマのうた（読む）
光村図書６	平和について考える（話す・聞く）〈資料〉平和のとりでを築く
三省堂６	猿橋勝子 平和な世の中を築くために（話す・聞く）
教育出版６上	川とノリオ（読む）
学校図書６下	フリードルとテレジンの小さな画家たち（読む）

これらは，国語科学習指導要領の第５学年及び第６学年の各領域の目標に出てくる「意図」や指導事項に出てくる「自分の考え」を子どもたちに持たせるための題材である[1]。つまり，子どもたちに「戦争や平和」への思いや考えを持たせるためのものである。しかし多くの子どもたちが学習前から「戦争はいけない」「平和は大切である」という考えをもっている。では，考えとしては，何を子どもたちに身につけさせる必要があるのだろうかと考え，この学習での学ぶ意義を「戦争はいけない」「平和は大切である」という考えをぶれることのないより強固なものとするとしたのである。

そして，ぶれることのない考えをもたせるために，単元の流れを作る際に，絵の見方に段階をつ

けるという工夫を加える。

何も知らせずに絵を見せる。
↓
本文を通読し，どんな背景をもった絵であるか知らせる。
↓
初発の感想から学習を進める。
↓
最後にもう一度，絵を見せる。

このように，学習に段階を設けてその都度，「戦争はいけない」「平和は大切である」と考えさせることで，考えの深まりを感じながら学習を進めさせ，当たり前のことをより当たり前と考えることの意義を，子どもたちが感じることができるようにする。

(3) 授業の実際

第１次　絵を鑑賞しよう

まず，教科書にあるビリー＝グロアーさんの「絵から聞こえる声を聞いてください。」というメッセージに応える下準備として，フィンセント・ファン・ゴッホが描いた「ひまわり」（図１）の絵を提示し，絵から聞こえてくる声に耳を傾けるとは，どういうすることであるのかを捉えさせた。「絵から聞こえる声」とは，作者がどんな思いをもって絵を描いたかに思いをめぐらせることとした。

図１　「ひまわり」

その後，教科書に載っているテレジン収容所に連れてこられた子どもたちが描いた２枚の絵（図２）を提示し，絵から聞こえてくる声に耳を傾けた。ただし，絵から聞こえる声に耳を傾ける際，子どもたちはまだ教科書の本文を読んでおらず，２枚の絵が，誰がどのような状況で描いたものであるかという背景は知らない状態である。

図２　左　マリカ＝フリードマノヴァー（女）
1932 年８月６日生まれ，
1944 年 10 月４日アウシュビッツへ
右　ルース＝ハイノヴァー（女）
1934 年２月 19 日生まれ，
1944 年 10 月 24 日アウシュビッツへ

子どもたちが聞いた絵からの声
(左の絵)
・暇だから落書きをしよう。
・絵が上手になりたい。
・背景は夕方にしよう。
・試験が嫌で，暇をつぶそう。
・花を見た感動を表そう。
・頭の中を整理したい。
・授業が面倒だ。
・助け合って生きていこう。
・みんな違ってみんないい。
(右の絵)
・遊びたい。
・流行らない公園で人気でないな。
・遊びに夢中になってしまう。
・楽しいことは共有しよう。
・子どものうちはしっかり遊ぼう。
・さみしい。
・にぎやかだな。
・子ども時代の思い出を描こう。

第２次　本文を読んで自分の考えをもとう

①本文を読んで初発の感想を書く

本文を読み始めると，教科書の挿絵として第１次で見た絵が出てくるため，驚きの表情を見せる子どもが多くいた。考えの深まりに段階（知る前⇒知った後⇒読み深めた後）を付けるために，絵

の背景を初めて知った時の初発の感想をノートにまとめさせた。感想のキーワードを拾い上げると，

・かわいそう
・絵のもつ力やフリードルや周りの大人がすごい
・日本は平和で良かった

という３つに分けることができた。

②何がかわいそうなのか

第１次で絵から聞こえてきた声が，第２次で絵の背景を知ることで変わってきていることを確認し，学習計画を立てた。学習計画は，図３を用いながら子どもたちと話し合い，単元の最後には絵から聞こえる声に再度耳を傾けることとした。

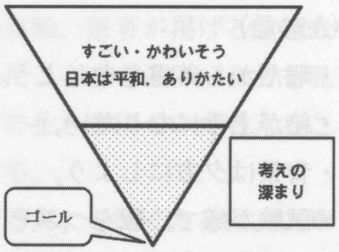

図３　考えの深まりとは

その後の時間は，戦争においてユダヤ人がどのように迫害されたのかを捉えさせるために，初発の感想で出たキーワードの一つである「かわいそう」という言葉を中心として，本文のどこの部分で，なぜかわいそうだと感じたのかを交流する時間とした。子どもたちは，ユダヤ人が戦争下やテレジン収容所でおかれた境遇，生き残ることが困難であったことなどを，本文から読み取り，今の自分と比べながら「かわいそう」だと感じた根拠を探していった。子どもたちの中には，かわいそうだと思うことは，一生懸命生きようとした人たちに対して失礼なのではないかという考えも出てきた。

③どこがすごいのか

この時間は，フリードル＝ディッカーの生き方や周りの大人の子どもたちを思う気持ちを捉えさせるために，初発の感想で出たキーワードの一つである「すごい」という言葉を中心として，本文のどこの部分で，なぜすごいと感じたのかを交流する時間とした。子どもたちは，「すごい」と感じた本文の場所を探す活動を通して，フリードル＝ディッカーと大人たちが，子どもたちの生きる希望を絶やさないために，命がけで絵の教室を開き，絵の材料を集めていたことを捉えていた。

④多くの絵を見て

初発の感想の中で，本文の「あれ果てた収容所の片すみから，子どもたちの絵，四千枚が見つかったのです。」という文章を読んで，「テレジン収容所で描かれた他の絵も見てみたくなった。」という記述があった。そこでこの時間は，埼玉県平和資料館に保管されているテレジンの子どもたちの絵のパネルをお借りし，多くの絵を見て絵から聞こえてくる声に耳を傾けメモをとる時間とした。

図４　絵を見て，戦争や平和と向き合う

このパネルには，教科書で書かれている内容が要約されていたり，教科書には載っていない情報が書かれていたりした。

《子どものノートに書かれたメモ》
・毛糸がなくなったから，自分の髪の毛を使っている。（作者不明で未完成の作品から）
・天国のことを描いている。
・絵を描きながら家族を想う。
・一家族につき荷物 50kg まで。
（収容所に持っていけるもの）
・収容所前の思い出を描いている。
・ガス室で殺された。

（アウシュビッツに行った人たち）
・自由を願って，蝶の絵が多い。
・詩の教室もあった。
・ヨセフさんは，目の前の現実を描いている。
・動物の絵にフォークが刺さっている。

《多くの絵を見ての感想》
・帰りたいけど帰れないという思いが伝わってくる。

第３次　改めて見た絵が訴えるものは

学習のまとめとして，第１次で見た２枚の絵を再度見て，絵から聞こえてくる声に改めて耳を傾ける時間とした。まず，第１次で聞こえた声と，本文の初発の感想のキーワードを全体で確認した。その後，第２次で行った学習の振り返りを簡単に行い，再度絵から聞こえる声に耳を傾ける活動に繋げた。

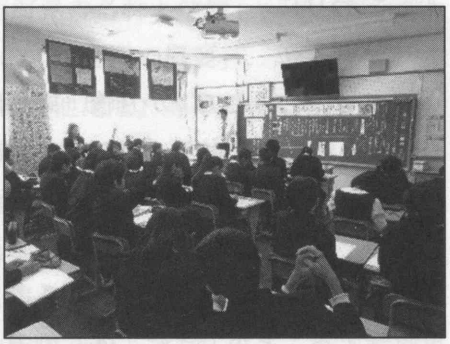

図５　授業の様子

子どもたちは，第１次で書いた絵から聞こえていた声の横に改めて聞こえてくる声を書いた。

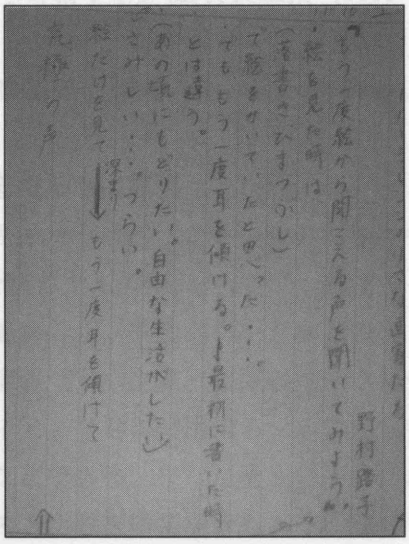

図６　聞こえてくる声をまとめたノート

その後，改めて聞こえてきた声を班でまとめ，究極の声として，全体で紹介し合った。

究極の声としてまとめたもの
・普通の生活にもどりたい(昔にもどりたい)
・自由にして
・平和になれ

そして，その究極の声を聞いて，最後に授業の感想をノートに書かせた。

授業の感想
・戦争が起こるとこんなにもつらいことが起きる。もう二度とあってほしくない。平和な世界になればいい。
・戦争があったら苦しむ人がいる。みんなの笑顔がなくなる。戦争をやめて，みんなの笑顔を広げて平和な世界にしたい。

４　考察

(1) 主体的に学ぶ授業を構成する

積極的に学ぼうとすることができたかという問いに対して 94%の子どもが肯定的に回答している。

その理由として子どもたちが自由記述であげたものに，「本物の絵を見ることができた。」「新しい知識を得ることができた。」というものがあった。これはどちらも，埼玉県平和資料館からお借りした絵のパネルを見た授業のことを書いており，子どもたちの学びたいという気持ちをできる限りかなえたからこそ得られたものであると考える。

本文を読まなければ学べない必然性を授業の中に作るという手法に対して，授業者としては，子どもたちの思考に寄り添いながら，子どもたちが，なんとなく感じ取った無意識の部分を意識化することができたのではないかと思っていた。しかし意欲・関心を喚起する上で効果を感じたと回答した子どもはおらず，評価の仕方をより厳密にして調査をする必要があると感じた。

(2) 学ぶ意義を見つめさせる

学ぶ意義を見つめさせるために，単元の流れに工夫を加えたことは有効であったと考える。

理由としてまず，第３次の授業の最後において，「かわいそう」や，「日本が幸せでよかった」という意見が授業の中で出てこなかったことが挙げられる。これは，学習を進める上で，早い段階でそれらの意見を出させ，その意見がどう変わるかを考えさせたからであるが，この流れにしなければ，授業の最後でも１人２人はただ「かわいそう」といった意見をもったままで学習を終えていたのではないだろうか。

次に，ある子どものノートの記述に「この声を聞くためだけにやってきた」というものがあった。何のために学習しているのかを自覚し，そのことに意義を感じて進めてこられたのであろうと思われる。

最後に，「『戦争はいけないこと』『平和は大切であること』という考えを，学習前からもっていたが，今回の学習で何か得るものがあったか」という質問に対して92%の子どもが，得るものがあったと答えた。「それは何か」という自由記述の欄には，「知ることの大切さ」「戦争の中で必死に生きていた人がいたことが分かった」と書かれていたものがあった。これは野村路子さんの「事実があるなら，それをきちんと自分の目で見て，知らなくてはならない」[2]という思いと重なるものであったことから，子どもたちは，学ぶ意義をしっかりと感じながら，要旨を的確に捉えることができていたことが分かる。

このことから，今回学習を進める上で単元の構成に工夫を加えたことは有効であったと考える。

(3) 国語の学習への関心・意欲

学習を終えて行った国語の学習全般に関わるアンケートの中で，関心・意欲の項目が10ポイント上昇した。今回のような授業を継続的に行うことで，子どもたちの国語の学習への関心・意欲は向上していくことが，考えられる。

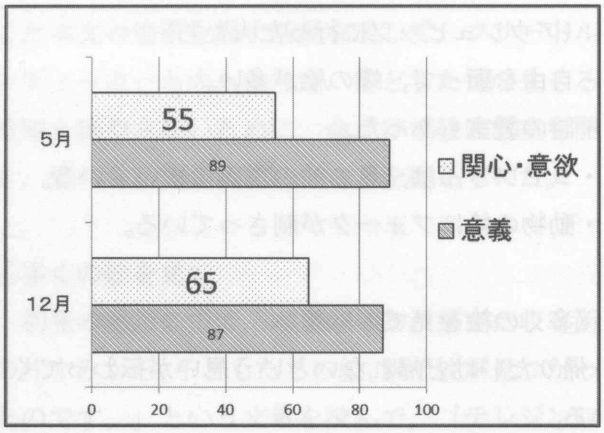

図７　国語科の学習に関わるアンケート結果

4　おわりに

この学習を終えて１か月後，野村路子さんが中心となり運営している「テレジンを語りつぐ会」のWebページ[3]にこの学習が紹介された。子どもたちとともにWebページを見ながら，改めてこの学習を思い出し，学ぶこと・知ることの大切さを再認識することができた。多くの方々の協力をいただいて今回の実践ができたことに深く感謝申し上げる。

＜引用文献・参考文献＞

1)　文部科学省「小学校学習指導要領解説　国語編」，p.14，p.18，2008，東洋館出版社.
2)　野村路子:「子どもたちのアウシュヴィッツ」，p.225，1998，第三文明社.
3)　テレジンを語りつぐ会Webページ
http://www.teresien.jp/